

兼 覽 王 論

—その『古今集』へのかかわりについて—

村 瀬 敏 夫

一、襲芳舎の賜宴

『古今集』離別部には次の歌群（三九七～三九九）がある。⁽¹⁾

かむなりの壺に召したりける日、大御酒などたうべて、
雨のいたう降りければ、夕さりまで侍りて、まかり出で
ける折りに、盃を取りて 貫 之

秋萩の花をば雨に濡らせども君をばまして惜しとこそ思へ
と詠めりける返し 兼 覽 王

惜しむらん人の心を知らぬ間に秋の時雨と身ぞふりにける
兼 覽 王 にはじめて物語して別れける時に詠める 躬 恒

別るれど嬉しくもあるか今宵より逢ひ見ぬさきに何を恋ひま
し

この一連の歌は、離別部の中で特異な性格を有している。すな
わち『古今集』の離別歌は、旅立つ人への送別の歌、あるいはあ
とに残る人々への留別の歌、または京洛以外の土地で、行きずり

に出会った人との別れを詠んだ歌がほとんどで、要するに、旅が
契機となって離別歌は詠まれている。しかるにこの歌群のように
宮中で会った人との別れを惜しむ歌は珍しく、されば峯岸義秋氏
も「ここにおいて私は、離別の入ころ√さえあれば、一夜の離
別でも撰歌の場合その部に入れられたことを知り得たのである」
と言及されている。⁽²⁾

この詠歌がなされたのは、延喜四年秋の頃、すなわち『古今集』
の編集作業中の出来事であった。⁽³⁾ こうした立場でなければ貫之ら
卑官の撰者たちが、後宮の奥深くにある「かむなりの壺」（襲芳舎）
で宴を賜ることもなかったからである。一方の兼覧王はその頃散
位ではあったが、⁽⁴⁾ 従四位下の位階を持つ中流貴族であり、後述す
るように、すでに宮中における要務を歴任していた。

しかるに撰者らと兼覧王との関係は、上掲の詞書や歌詞に見る
ように、これが初めての語らいであった。両者の間には画然たる
身分の相違があり、さらに職掌の違いもあって、以前に会う機会
もなかったのだろうが、しかるにその際の惜別の詠作をあえて

古今集に追入れたことは、⁽⁵⁾撰者らにとって、この兼覧王との会見が忘れたい強い感動を呼び起こしたからであろう。

ところでこの詠歌に関連して、兼覧王が『古今集』の編集に関与したとする見方がある。⁽⁶⁾しかしそれに関する所伝も全く無く、また兼覧王が延喜四年秋の頃という、編集作業の後期段階において初めて登場するというのも、全体の編集過程の流れの上からも唐突に過ぎよう。この惜別の贈答歌の存在は、むしろそれを否定するものであるが、では兼覧王がこの賜宴に出席したのは、いかなる経緯によるのか。そして『古今集』における彼のかかわりほどの程度のものなのか。それらについて考えてみたい。

二、官僚としての兼覧王

兼覧王の父はかの文徳皇子惟喬親王である〔古今和歌集目録〕「本朝皇胤紹運録」。立坊の夢破れた親王に藤氏の迫害はさらに続き、ついに親王は貞観十四（八七二）年七月に出家した。時に二十九歳の若さである。『三代実録』は疾病のためとするが、親王はその後寛平九（八九七）年二月まで、二十五年も生き長らえているから〔日本紀略〕、病気は口実と見るべきだろう。

当時の兼覧王はまだ幼少であった。彼の没年は承平二（九三二）年であるが、没齢は不明である〔目録〕。惟喬の出家以前に生まれたと見て間違いなからうが、それを下限と見て、さらに皇孫として従四位下を初叙された仁和二（八八六）年〔実録〕同年・正・七条の年齢に、令制に定める藤叙の年齢二十一歳以上を適用すれば、貞観八（八六六）年以後の生まれとなり、それが上限となる。

前述の「身ぞふりにける」と老いを嘆く兼覧王の歌から考慮すれば、彼の生年は上限に近い貞観八、九年頃と見られ、貫之よりも四、五歳ほどの年長であったろう。

ところで『中古歌仙三十六人伝』では兼覧王を「仁明天皇孫。国康親王男」とする。国康親王は仁明皇子子惟喬親王の叔父に当たるが、この記載を単なる訛伝とするよりも、惟喬が出家の際に幼少であった兼覧王を、『紹運録』にその子女の記載のない国康の養子にした可能性も存しよう。

ところで『目録』に載せる兼覧王についての記事は、次のごとくである。なおイは『三十六人伝』による校異であり、「」内は『三十六人伝』にナシ。

イ仁明天皇孫。国康親王男。
〔四品惟高親王男。〕
仁和二年正月七日従四位下。〔王氏。寛平二年二月河内權守。四年任侍從。六年八月中務大輔。九年五月民部大輔。〕
イ昌泰元年五月十日任。
七月十七日山城守。延喜六年正月七日従四位上。〔給國。〕
イ十七日任。
九月大舍人頭。〔十一年〕二月神祇伯。十八年二月彈正大弼。
イ廿九日任。
廿一年正月兼大和權守。延長二年正月七日従四位下。三年六月宮内卿。〔承平二年〇月卒。〕

この経歴の意味するところを検討しよう。まず兼覧王は皇孫にふさわしく、若くして従四位下を初叙されたが、その後の官途はかんばしいものではなかった。すなわち兼覧王と同じ日に、是行王がやはり従四位下を初叙されたが、⁽⁷⁾この是行王の出自は不明ながら、彼は初叙の翌年六月十三日に大学頭に任ぜられており〔実録〕、それに対して兼覧王の任官は、初叙から四年を経た寛平二年二月の任河内權守まで待たねばならなかった。この河内權頭は

遙任と見られ、實際は宮中の雑務に従事したのだろうが、當時は関白基経による藤氏の専横下にあった時期だから、この差別待遇も准喬の子という立場が作用したろう。

しかるに寛平三年正月に基経が世を去ると、摂関家に批判的な宇多天皇の発言力が増すが、その時期に兼覧王が侍従として帝側に仕え、さらに中務大輔から民部大輔へと、廷務の中樞に入るを得たのは、彼の境遇に同情してその才幹を用いようとした天皇の意向によるのであろう。しかも民部大輔時代の直屬上官たる民部卿は、天皇股肱の菅原道真である。天皇は両者の協力を期待したのかもしれない。

兼覧王の任民部大輔は寛平九年五月二十五日のことと見られるが、それから半月もたない六月八日に、台閣の首班として天皇を輔佐する右大臣源能有が、五十三歳の壮齡で没した。文徳皇子たる能有は、皇親として天皇の対摂関家政策を支える柱石だったから、彼の死は天皇の政權担当の意欲を急速に減退させ、間もなく七月三日に卒然として東宮敦仁親王（醍醐天皇）に譲位するに至る。

ところで『目録』によれば、兼覧王は同年の七月十七日に山城守に任ぜられている。しかるに『三十六人伝』では翌昌泰元年五月十日のこととして十ヶ月の差がある。どちらが正しいのか。

兼覧王の前任の山城守については、『明月記』嘉禄元年正月六日条に「蔵人頭兼受領、平季長寛平九年正月兼山城守^{壬時頼}とあるが、さらに『紀略』同年七月二十二日条には、「蔵人頭從四位下守右大弁兼行侍從山城守平朝臣季長卒」という記事がある。『紀

略』の記事は當時の記録にもとづいたものと見られるから、季長はその没するまで山城守を含む諸官を併任していたのだろう。彼は宇多朝にも蔵人頭であり、没した月の五日、新帝の即位とともに蔵人頭に再任されたばかりだから、急病のために官職を辞する間もなく、急死したのだろう。そうなるとそれ以前に兼覧王が山城守に任ぜられるはずもないから、『三十六人伝』の昌泰元年五月就任の記事が捨てがたくなる。おそらく季長の没後、しばらく空白を置いてか、あるいは誰かが短期間山城守に就任した以後かに、兼覧王が昌泰元年五月十日に山城守となった可能性が強い。なおこの五月十日には、『公卿補任』延喜十五年条の藤原恒佐の官歴に見るように小除目が行われているから、その際に任命されたのだろう。

當時の山城国府は、現京都府乙訓郡大山崎町にあった河陽離宮を転用したもので、都からは近く、したがって山城守も季長の例に見るように、中央の顯官が兼任することが多かった。しかるに兼覧王の場合は専任の山城守であり、民部大輔として廷務の中樞にあった彼としては、左遷ともいふべき遷任であった。彼に恩顧を与えていた宇多天皇が退位した以後の宮廷の空気は、以前と違っていたらうし、また彼には吏才の限界があったのだろう。そしてそれを象徴するような次の逸話が、蔵中スミ氏によって紹介されている。⁽¹¹⁾

昌泰元年十月、宇多上皇は鷹狩を兼ねて畿内を遊幸した。その最初の晩、赤目御厩（現京都市伏見区内）に宿泊したが、翌二十一日の早朝、山城国守兼覧王は獻物を持って参上した。しかるにこ

のあたりの事情を伝える紀長谷雄作の当日の「競狩記」(『紀家集』所収)には、欠脱が多くて判然としないが、藏中氏の解説に従えば、彼は献物の秣稻百束を「上皇に御撈揆することもせず然るべき奉獻の手續きを経ることもなくて、庭中に積み上げるように置き並べた」のである。この行為は彼に恩顧を与えた上皇の機嫌をも損じ、侍臣を困惑させて、さらにはその秣稻を奪い取ろうとした者も現れて、それを追捕するという騒ぎを招くに至る。『競狩記』の作者はその混乱の責任をすべて兼覧王に帰せしめて、彼を「無智」とまで評しているが、のちに従三位中納言にまで経上つても下積み生活の長い長谷雄には、公務の慣行に疎い皇族上がりの兼覧王の行為が不快でたまらなかつたのだらう。新参国司の兼覧王にも同情すべき点があつたろうが、しかしこうした宮廷秩序への認識の乏しさは、彼が中央の官界から地方官に転出する因ともなつたのだらう。

国司の年限は四年だから、兼覧王の山城守としての任期は昌泰元年五月の就任とすれば、長く見ても延喜二年の前半には終わるかつて私は兼覧王が山城守に二期在任したかと考えたが、それは前出の兼覧王の経歴に、延喜六年正月の叙位が「給国」(これは「治国」の誤りであらう。松平文庫蔵の『古今和歌集目録』(二〇一四)には「治国」とある)の勞によつて昇叙したもので、その頃まで在任したと見たのである。しかるにこの時代は、平安中期以後にしばしば見られるような国司の重任や延任はほとんど行われず、また『目録』に見る他の「治国」による昇叙の例、源惠や源当純の場合でも、国司の任期が終わつたと見られる三年後、または二

年後に昇叙しているから、それが再任の論拠とはならない。前述の逸話に見るように、国司として有能とは思えない兼覧王は、山城守の任期が終わると引き続き任官することもなく、散位の境遇に沈むのである。

兼覧王の散位の時期は、その後延喜六年九月に大舍人頭に任ぜられるまで、少なくとも四年半以上に及ぶが、折しもそれは『古今集』の撰集期間にはば一致する。彼が『古今集』の編集に無関係であることは前述したが、散位であればなおさらであらう。

しかしながら歌人としての兼覧王は、『古今集』において注目すべき存在である。ここで彼と和歌との関係について述べよう。

三、兼覧王と和歌

『古今集』に入集した兼覧王の和歌は五首である。五首という数は少ないとも見られるが、すでに述べたように、『古今集』では当時存命の男性貴族の作者は極めて少ない。これは漢詩文に比べて和歌を第二芸術視する差別観から来たものと見られるが、その作者名及び官位(延喜五年四月現在)を入集歌数順に挙げれば、次のようになる。

六首 源宗于(従四位上・兵部大輔)

五首 兼覧王(従四位下・散位)

四首 藤原忠房(従五位下・左兵衛佐) 藤原兼輔(従五位下・内蔵助)

二首 藤原時平(従二位・左大臣) 景式王(従四位下・散位?)

藤原兼茂(従五位下・左衛門佐) 平中興(従五位下・

遠江守

一首の入集者は省略したが、これを見れば兼覧王が、現存貴族作者の中では注目すべき存在であることがわかる。すなわち彼は歌人としてすぐれていたばかりでなく、歌人として遇せられるのを誇りとしていたのである。

父の惟喬親王が和歌を好んだことは、『古今集』における二首の入集歌（七四・九四五）や、紀友則に父有朋の遺詠を求めた同八五四番歌の詞書に知られるが、その影響を受けた兼覧王も、若い頃から恋愛歌を中心に和歌に親しんだことだろう。『後撰集』に入集した彼の四首（七八・三三八・六〇六・七七九）がすべて女性へ与えた歌であるのも、その一端をうかがわせるが、体制からはじき出された父子には、やはり体制の外にある和歌が心の拠り処であったのだろう。

ここで兼覧王の前出以外の『古今集』入集歌四首（二三七・二九八・四五七・七七九）を挙げよう。

物へまかりけるに、人の家に女郎花植ゑたりけるを見て
詠める

(1) 女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたる宿に一人立てれば
秋のうた

(2) 竜田姫手向くる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらめ
いかがさき

(3) かぢに当たる波の雪を春なればいかがさき散る花と見ざらむ
(題知らず)

(4) 住の江のまつほどひさになりぬれば声たづの音に鳴かぬ日は

なし

これらの歌に見られるものは、古今集時代の新風を反映した興趣ある詠みぶりである。まず(1)ははかなげに咲く女郎花を、荒れた家に一人淋しく住む女に擬人化したものであり、また(2)は舞い散る木の葉を、秋の女神の竜田姫に捧げる幣に見立てたもので、「手向くる神のあればこそ」の表現が面白い。(3)は当時流行した物名歌で、表現の制約から常套的な発想となっているが、近江の伊香崎の実景に触れて詠まれたものであろう。さらに(4)は恋部の歌で「題知らず」となっているが、おそらく実際に女性に与えた歌と見られ、枕詞・掛詞・縁語を多用して、「詠む歌」よりも「読む歌」としての技巧を凝らしている。いずれも真情を吐露するという点には欠けるにしても、いかにも貴族の歌にふさわしい、物馴れた余裕のある詠みぶりとなっている。

しかるにこれらの歌はその詞書に見るように、公けの歌会・歌合などに詠まれたものでなく、いずれも私的な場における詠作である。さればこれらは、撰收資料としての兼覧王の家集から撰入されたと思われる。

その真名序に記すように、『古今集』の撰進に当たっては二度の詔命が発せられ、前詔は撰收資料としての「家集並びに古来旧歌」を召すものであった。その際に収集された諸家集の中に、「兼覧王集」もあったかといえは、いささか疑問の点も存する。前述した『古今集』の現存貴族作者についていえば、寛平御時后宮歌合に出詠してすでに歌名を知られていた宗子、『古今集』九九三番歌の詞書によって、寛平時代から歌人として遇せられた忠房、

醍醐天皇の外戚としてその東宮時代から側近に仕え、勅撰事業に近い立場にあった兼輔などは、その家集を召されてしかるべき人々であろう。それに反して兼覧王はその歌人の才能はあっても、古今集以前の公的な和歌行事に出席することはなく、また散位という立場もあって、歌人としての知名度には欠けるものがあつたからである。もとより狭い宮廷社会のことだから、兼覧王が和歌を好むという情報はすでに伝わっていて、その家集が求められた可能性はある。しかしその場合にしても、現存貴族作者では第二位の五首入集の処遇が、当初から与えられていたとは思われない。兼覧王の多数入集には、冒頭に述べた襲芳舎の賜宴における撰者らとの邂逅が、大きな契機となつたのであろう。

四、古今集へのかかわり

『古今集』の撰者らが襲芳舎に宴を賜つたのは、前述のごとく延喜四年、秋萩の花の咲く頃であつた。その年の四月六日から開始されたと見られる後詔による作業、すなわち『古今集』の編集作業もたけなわの時期となつて、その士気を鼓舞するために、忙中小閑の酒宴を賜つたのだらう。

この襲芳舎は内裏の西北隅にあり、かつて落雷した木がそのままにしてあつたことから、かみなりの壺とも呼ばれた⁽¹⁴⁾。後宮五舎の一であるが、内裏の片隅にあるので、落雷の際の天皇の避難所とされたり、皇太子の直曹となつたり、⁽¹⁵⁾宮廷女房の部屋になつたり、⁽¹⁶⁾さらに右大将の止宿所にもなつたりするなど、種々の用途に使われていた。それだけに殿舎としての格式は低かつたのである。

しかるに『古今集』の撰者らは、勅撰事業の撰者としては類を見ないほどの卑官揃いで、筆頭撰者の友則でさえ正六位上相当の大内記に過ぎない。これは当時における和歌の文芸的地位を如実に反映したものといえるが、彼らに与えられた宴席が、禁中の片隅の襲芳舎に設けられたのも、その身分に見合つた処遇といえるだろう。

さればその席の主賓はもとより撰者らであるが、その他の出席者もさして高位の人がいたとは思えない。冒頭に挙げた歌群の詞書によれば、主賓である撰者らは兼覧王とかなり長時間語り合つたらしいが、そうなると兼覧王は、撰者以外の出席者の最上位者と見られよう。では彼がその場に居合わせたのは、どういう事情によるか。

当時の兼覧王が散位であつたことは前述したが、無官の散位も位階に應じて位祿などの給付があつたから、時々出仕して種々の公務に従う義務があつた。⁽¹⁷⁾されば兼覧王も、この襲芳舎の宴における行事管理者的な業務を命ぜられたのだらう。それがささやかな行事であるだけに、散位にふさわしい仕事と見られたのだろうが、少なからぬ散位の中で彼が選ばれたのは、やはり彼が和歌を好む人であることが考慮されたかもしれない。

兼覧王は『古今集』の撰者の内、友則とはすでに面識があつた可能性がある。前述のように、紀氏出身の生母を持つ父の惟喬親王は、友則に知遇を与えていたからである。しかるに他の撰者らとはそれ以前の交渉はなく、しかもその間に甚だしい出自の差があるにもかかわらず、彼は親しく語りかけたのである。

撰者らから見れば思いがけないこの行為も、当時の兼覧王の置かれた立場から考えれば、決して不自然なものではない。彼は皇孫に生まれながら、その前半生はすでに見たように不本意の半生であった。屈折されたその思いは、彼の性格を自然と謙抑に慣らしていったであろう。あの赤目御殿における献物の際も、当日せっかく早朝から参上しながら、世馴れない不器用な行為から、恩顧ある宇多上皇に礼を失する結果となったが、それは悔やんでも悔やみ切れない悔恨を残したろう。それに加えて散位に沈む日々は、彼に身分差への意識を失わせたのである。しかも相手は歌人である。自らも和歌を愛する兼覧王の当時の心境としては、歌人と語るのはこよない慰藉であつたろう。そうならば身分の違いは問題ではない。彼らは「夕さりまで」胸襟を開いて語り合ったのである。

撰者らの気持もその歓談の間に、意外さから次第に兼覧王に対する敬慕の念へと変わっていったであろう。彼等は当代の貴族らが女性との交情の間に和歌をもてあそびながら、歌人として遇せられるのを拒み、専門歌人を軽視するのを見て来た。それらを見馴れた眼には、撰者らを礼遇して和歌を語る兼覧王の存在は、希有のものと思われたらう。

雨に降りこめられたことが歓談の時間を長引かせはしたが、やがて彼らは別れねばならなかった。同じ宮廷に仕える間柄であれば、再会を期するのは容易であつたにもかかわらず、貫之はその惜別の情を和歌に託さずにはいられなかった。その歌は冒頭に見たように、兼覧王との別れを惜しむ心を、秋雨に濡れてこぼれ散

る庭前の萩の花によそえたもので、実景の中に心情がよく写し出された秀歌である。一般に『古今集』の貫之歌は趣向を重んじて、技巧を凝らすところにその特徴があるが、この歌は真情を歌い上げて技巧の跡をとどめない。別離の憂情は、持ち前の技巧に遊ぶことを許さないほど痛切だったのである。

その貫之の真情に兼覧王も心を打たれたらう。すでに見たように彼の詠風は趣向性の目立つものだったが、貫之の思いに誘発されて、彼の歌も真情を詠んだものになっている。下の句の「秋の時雨と身ぞふりにける」には掛詞が用いられているが、いや味のないすっきりとした詠みぶりで、貫之の惜別の情を素直に受け止めて、彼を識ることの遅さを嘆いている。また兼覧王はわが身の老いをも嘆いているが、前述したように、兼覧王の生年を貞観八年とすると、延喜四年では三十八、九歳となる。四十で寿宴を催す当時の人生感覚からは、それは当然の思いであつたろう。

さらに躬恒の歌も、彼らしい機知的な発想で、惜別の情を嬉しさに置き替えて、それによって兼覧王を思う気持ちをさらに効果的に表現している。三者三様の詠みぶりではあるが、ともに真情を詠み上げたこれらの歌は、儀礼的技巧的な歌の多い離別部の中で異彩を放つものとなった。

この襲芳舎の宴は、撰者らに兼覧王の存在を強く意識づけた。前詔に应じて、『古今集』の撰収資料である「家集並びに古来旧歌」が献上されたのは、延喜四年の春のことと見られるが、しかるに延喜五年二月の右大将藤原定国四十賀の屏風歌も『古今集』に採られているから、さきの献上歌以外の歌も、『古今集』に撰

入することを撰者らは許されていたのだろう。されば兼覽王との間にかわされた離別歌も、ここに採られることになったが、その際に兼覽王の家集が求められた可能性もあり、すでに家集が召されていたのであれば、入集すべき歌が再吟味されたであろう。兼覽王の五首入集という数は、歌人としての彼を認めながら、現存貴族という立場も顧慮した適切な歌数といえるだろう。

五、その後の兼覽王

延喜六年正月の叙位で兼覽王は治国の勞で從四位上に昇叙した。仁和二年以来、二十年ぶりの昇叙であるが、この時期に昇叙したのは、前年の四月に行われた『古今集』の撰進と無縁ではあるまい。『古今集』における彼の存在が醍醐天皇の眼に止まり、それが昇叙につながったと見られよう。諸王の中には從四位下に初叙されても、初叙のままに終わるケースも多いから、これも和歌の徳といえる。しかも幸運はそれのみにとどまらず、その年の九月には大舍人頭に任ぜられて、散位生活から抜け出すのである。

この大舍人頭は中務省が管轄する大舍人寮の長官で、宮中の雑務を行う大舍人を支配する職である。その相当位階は從五位上で閑職といふべきものだが、従前の兼覽王に対する評価では、この程度の役しか与えられなかったのだろう。

兼覽王はこの大舍人頭に五年在任して神祇伯に移った。これは神祇官の長で格式は高く、從四位下の相当官である。実務的な官職ではないが、皇孫にふさわしいものでまずは栄転といつてよい。それは彼が大舍人頭として大過なくすごしたからだろう。

神祇伯は七年在職して、延喜十八年二月に彈正大弼となる。これは彈正台の次官で、長官の彈正尹は多く親王が任ぜられたから、事実上の長官である。彈正台は律令では警察機関となる要職であったが、檢非違使の職権拡大により、当時すでに有名無実の官となっていた。兼覽王の就任以前には、參議藤原興範が大弼を兼任していたが、興範が延喜十七年十月に没したので、神祇伯在任が長くなった兼覽王が遷ったのだろう。これも閑職ではあるが、散位にもならず、公卿が兼任してもよい職に任ぜられたのは、彼の人柄の良さが周知されて、捨てられなかったのだろう。

彈正大弼にも七年在職するが、その間、二十一年正月には大和權守を兼任し、三年後の延長二年正月には正四位下に昇叙するというように、当時の兼覽王はすでに六十に近い年頃であったが、ようやく一応は満足すべき処遇が与えられたのである。

昇叙の翌年十月、宮内卿に任ぜられる。⁽²²⁾宮内卿も參議が兼任することが多く、かつて宇多天皇の外叔父に当たった十世王が、寛平三年から延喜十六年まで二十五年間にわたって在任したが、參議になってからも十九年間兼任したので、その慣行を受けて、三善清行・橘良殖・源悅らの諸參議も兼任した。しかるに左大弁も兼任した悦が、多忙のため延喜二十一年正月に宮内卿を辞した後は、專任の卿が置かれたらしい。政治的な権力はないが、名望の官であるから、兼覽王の最後を飾るのにふさわしい官職となった。

兼覽王は承平二年某月に没する。没齡は六十六、七歳であった。その頃躬恒はすでになく、貫之は遠く土佐の任にあった。高官である兼覽王の死は、土佐の貫之のもとにも伝えられたらうが、こ

の年の彼は、恩顧を蒙った右大臣定方の訃報にも接していた。貫之は三十年前を思い起こして、どれほどの感慨に耽ったろうか。ちなみに彼が晩年に編集した『新撰和歌集』には、躬恒の「別るれど」の歌は採っているが、彼と兼覧王との贈答歌は採っていない。また兼覧王の他の歌も採っていない。

ここで『古今集』以後の兼覧王の歌歴を見ると、彼は延喜十三年三月の亭子院歌合に右方の方人の一人として出席し、

風吹けば思ほゆるかな住の江の岸の藤波いまや咲くらむ

の一首を詠んでいるが、それ以外の歌合や歌会に名を見出すことはできない。この亭子院歌合は規模こそ大きい、宇多法皇縁故の人々が出席した内輪の催しであった。それで法皇は昔のよすがで、兼覧王の出席を求めたのだろう。兼覧王も神祇伯という余裕のある立場にあったから、喜んで参じたのだろう。しかしその一首も凡庸なただごと歌で終わって、それ以外の和歌行事に顔を見せなかったのは、やはりアマチュア歌人の限界があったのだろう。

兼覧王の家集一卷は後世に残って、『後撰集』編集の資料となつたが、しかしその後の勅撰集から漏れたのは、彼に対する妥当な評価であろう。彼が平安後期、藤原範兼の『後六々撰』によつて、中古三十六歌仙の中に入れられたのは、同じ仲間となつた定文・深養父・元方・千里・棟梁・康秀・忠房らの古今集歌人と比べれば幸運といえよう。彼は古今集時代の現存貴族の中では、歌人というべき人であつたが、あの襲芳舎における運命的なひとときがなければ、後世に名を残すのはむずかしかったらう。そして彼の官途も暗澹たるものであつたかもしれない。

契沖の『余材抄』はかの離別の贈答歌について、「貫之・躬恒にかくよまれたる兼覧王、いかばかりなる人にか侍りけん」と、兼覧王の立場を羨んでいるが、彼の幸運はその場だけではなかったのである。

注(1) 『古今集』の本文は日本古典文学大系本による。

(2) 『平安時代和歌文学の研究』三三頁。

(3) 拙著『紀貫之伝の研究』一八五頁以降。

(4) 前掲拙著一八九頁で、延喜四年当時の兼覧王を山城守在任としたが、後述する論拠から改める。

(5) 『古今集』の撰集資料たる「家集並びに古来旧歌」は、延喜四年春の頃には収集されて献上されたと思われる。くわしくは前掲拙著一六六頁以降。

(6) 金子元臣氏「古今和歌集評釈」など。

(7) 前掲拙著一八八頁に景行王としたのは誤り。

(8) 「公卿補任」寛平九年条には、同年五月二十五日における任官の記事が多出する。

(9) 「藏人補任」醍醐天皇(藏人頭)。

(10) 「三代実録」貞観三年六月七日条。

(11) 「競狩記」の人物点描——平元規・兼覧王——(藤岡忠美氏編『古今和歌集連環』所収)。

(12) 前掲拙著一八九頁。

(13) 拙著『古今集の基盤と周辺』一四六頁以降。

(14) 「国史大辞典」(吉川弘文館版)「襲芳舎」の項(藤谷秀氏執筆) 題記「古今集註」巻四。

(15) 題記「古今集註」巻四。

(16) 『日本紀略』康保四年五月二十五日・同安和二年九月二十日条。

(17) 『今鏡』第三「すべらぎの下」(大内渡)。

(18) 『山槐記』応保元年十二月十七日条。

(19) 『延喜式』卷十八(式部上)。

(20) 注(5)と同じ。

(21) 公卿に関する事績は、以下『公卿補任』による。

(22)

『古今和歌集目錄』は延長三年六月の任官とするが、同月には他の補任の記事が見えず、『眞信公記』によって除目の事実が認められる『中古歌仙三十六人伝』に従う。

編集部より

◆近來、「投稿規定」を無視した投稿論文がままあって、編集部ではたいへん困っております。投稿される会員は、いま一度後掲規定を熟読願います。特に、論文コピーの一部添付は、ごなたも厳守してください。なお、投稿を郵送される場合は、お手数ながら書留にてお願いいたします。

◆最近の傾向として、ワープロ原稿が多くなっております。その場合、四〇〇字詰原稿用紙に換算して何枚になるかを明記して下さい。ワープロ原稿ではない場合でも、その旨、同様です。御協力下さいますようお願い申し上げます。

◆また、学籍にある者(特に大学院生)の場合には、指導教員の承認を必要とします。さらに、要旨(四〇〇字程度)を添えることも忘れないよう気をつけて下さい。

◆編集上の都合で、採用原稿を掲載する際に、図表・系図などの一部を、執筆者の了解を得て手直しさせていただくことがあります。御投稿の折には、あらかじめ御承知おき下さい。

◆初校刷については、割付け原稿とともに、各執筆者へ直接お送りいたしますが、必ず一兩日中に校正を終えられ、印刷所の方へ御返送下さい。

◆編集の都合で、再校以降の作業は編集部の方でさせていただきますが、内容が広範

多岐にわたるため、細心の注意を払っているにもかかわらず、思わぬ誤記を見落すこともあろうかと存じます。初校の際には、できるかぎり丁寧に御覧下さいますようお願い申し上げます。

* * *

『国文学研究』では、会員の皆様の著作の紹介につとめております。新たに著書を刊行されました際には、是非一部ご寄贈下さいますようお願い申し上げます。研究上の貴重な資料として永く保存致しますとともに、広く教員学生等の閲覧に供し、活用させていただきます。